

超微量物質ですから測定が困難です。ppmが一〇〇万分の一、その一〇〇〇分の一が一〇億分の一、そのまた一〇〇〇分の一が一兆分の一ですが、このあたりの数値でダイオキシンは効いてくる。構造をみればすぐにわかりますが、なかなか分解しそうにない超安定物質です。水俣病の有機水銀と同じ塩素化合物です。東京都公害研究所が行なった利根川ダイオキシンの調査は、子どもを産み終わった家族の男性研究員を選び、その結果は英語で発表して邦訳はしていません。

ベトナム戦争は道理に合わない。米ソ冷戦の一つの局面だとはいえ、アメリカがここまで乗り出してくる大義名分がない。また、大国が科学技術をもってしても勝てないことに鼓舞される気持ちもあります。この二つが合わさって「反戦」のうねりが広がります。私たちには、第二次世界大戦で日本がアメリカに負けたのはB29の圧倒的な装備と竹トンボのような零戦の差だという思いが強かったのですが、アメリカがその重装備で勝てないことの快感は、日本に限らずあったと思います。

安保闘争のあと、「三無主義」、つまり無関心、無気力、無責任がはびこる静かな大学のなかで、ベトナムが関心の中心になっていきました。ベトナムを問題にすると、戦前、戦中、戦後の日本がやってきたことの検証はまだ終わっていないという反省が強くなるのしかかっています。加えて、山口二矢的像も含めて一人で闘うという発想がありました。理工系の学生で反ベトナム戦争、反米、反核をスローガンにした「ベトナム反戦会議」をつくることになります。これは「会議」ですから組織ではなく、一人で闘うという意味を示しています。

「ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)」に対抗する気概ももっていました。ベ平連は、吉川勇一にしても小田実にしても、ちょっと「おじさん」で、ジェントルマン、インテリゲンチヤが中心にいる。「市民」という言葉も自分たちには馴染まない。眉つばの眼で見れば、小田実の市民は、古代アテナイの市民にいきなり飛んでしまう。働かない市民、奴隷を使う市民、男だけの市民です。「市民は暴力を振るわない」というのも嘘っぽいし、「市民連合」と言っても、どこに市民がいるんだという思いがありました。

「ベトナム反戦会議」は、東京大学の理学系大学院生を中心につくられました。主力は、山本義隆たち物理の大学院生で、日本物理学会がペンタゴン(アメリカ合衆国防総省)から三億円を受け取っているという「米軍資金問題」に取り組みます。アメリカでは財団とペンタゴンが大学を支えていますから、ペンタゴンが日本物理学会に資金を出すのはいわば当たり前のことです。その他にもありとあらゆる団体に資金を流しています。こちらが「対」と言っても、相手はキョトンとするだけでしょう。そういう構造に物理の大学院生たちが反逆していきます。東大全共闘の無党派、ノンセクトの中心はこの物理の大学院生たちでした。その意味では日大全共闘とは毛色が違います。

ベトナム反戦を主張するなかで、朝鮮戦争で、すでに日本は攻撃基地になっていたことが問題にされ、また対中国、対朝鮮半島の戦争責任にどう決着をつけるかが問題になりました。日本という小さな島国が、ニューギニアやシンガポールまで行って犯してきたこと、あるいは朝鮮半島で行なってきたことについて、自分たちは何をしたいのか。落とし前はついたのか、という問題です。

援助をすることで片のつく問題ではない。日本の援助で、アフリカや中近東に立派な病院が建っても、日本から送られた冷蔵庫も高級医療機器も梱包を解かれない。現地に電気がないからです。こうした漫画的なものではない援助のあり方を求めたら、少なくとも私たちは学問と教育の分野で行動を起こし、次世代につなげていくしかない。そこに大学批判が出てきます。

### 【死のにおい】

一九七〇年一月、三島事件が起きます。三島由紀夫は四五歳、四人の学生がつかまいます。森田必勝まさかつが一番弟子として三島の首を落とすことになっていましたが、首が斬れない。剣道で居合いをやっていた古賀浩靖が、交代して三島の首を落とす。次いで森田自身が古賀に首を落としてもらう。

三島由紀夫をその行動に駆り立てたものは何か。たとえば、深沢七郎の「風流夢譚」事件(深沢七郎が『中央公論』一九六〇年二月号に発表した小説「風流夢譚」の内容が不敬であるとして大日本愛国党議員の一七歳の少年が中央公論社長宅に押し入り、家政婦を刺殺、夫人に重傷を負わせた事件)のときには、中央公論社は存続の危機に立たされることにな